

## 編集後記

多くの方々のご協力により、論文審査を終了することができました。先ず、丁寧な査読を行って下さった編集委員の方々にお礼申し上げます。また、著者との事務連絡および印刷・出版に関わる業務を行って下さった石田雅氏はじめ鳥取大学の方々に感謝申し上げます。

論文査読作業を行った際、本誌刊行の意義について考えさせられた事項をメモして編集後記と致します。ただし、これはあくまでも個人的な想いであり、編集委員会としてのオフィシャルなメッセージではありません。

一般に、学術論文誌を刊行するメリットは、著者の立場でのメリットと読者の立場でのメリットがあります。学術論文の著者は、研究の成果をまとめる際に、自分の研究の立場や特徴、研究の弱点などについて、再確認する機会が自ずと与えられます。自分自身の反省はもとより、査読委員からのコメントや読者の反響など、投稿作業をとおして得られる情報は極めて貴重で、さらなる研究の発展につながるものが少なくありません。一方、学術誌の読者は、自分の研究を進展させる上で、他人の論文からそのヒントを得ることができます。

本誌「学術情報研究」は、総合情報処理センター等の「学術情報研究集会」に時期を合わせて、毎年1回刊行される学術誌です。もっと多くの頻度で、また、サーキュレーションもずっとよい学術誌が他にたくさんあるのに、また、インターネットの検索によって、必要とする情報は、簡単に得られるようになったいま、なぜ「学術情報研究」を刊行する必要があるのでしょうか？

この問いの答えとして、「同人誌」的な性格を挙げたいと思います。日常、同じような業務を行っている人々が、仲間とメッセージを交換する媒体としての意義です。同じような業務を行っている関係上、そのメッセージの交換は自ずと内容的にも、問題意識の上でも、著者と読者の整合性がピッタリということになります。この整合性のため、著者が得る読者の反響という点でも、読者の得る情報の価値という点でも、著者も読者も大きな「満足度」が得られます。得たい情報がまとまって掲載されている学術誌は、自ずと愛おしく感じられ、常に身近に置きたくなるものです。

今後、「学術情報研究」が継続的に刊行され、また、さらに発展してゆくためには、本誌の刊行の意義・哲学を明確にして（投稿規定には、このあたりが必ずしも明確になっていないように思われます）、それをもとに編集作業を行うことで、本誌の性格をいっそう際立たせることが重要であると思われます。ただし、「同人誌」的といえども、著者を限定する必要はありません。また、掲載論文のレベルは他誌に優るとも劣らないように、厳密な査読を行うことについては、特に指摘するまでもありません。「学術情報研究」がその役割を最大限に発揮できるよう、皆で一層努力したいものです。

「学術情報処理研究」

編集委員会主査 小澤 哲

「学術情報処理研究」編集委員会

主査	小澤 哲（茨城大学）	高良富夫（琉球大学）
	小野里好邦（群馬大学）	山岸正明（鳥取大学）
	外岡秀行（茨城大学）	谷口祐治（琉球大学）
	吉浦紀晃（群馬大学）	石田 雅（鳥取大学）

茨城大学 〒316-8511 日立市中成沢町 4-12-1 ozawa@mx.ibaraki.ac.jp